

あひける、其中へ屋敷より追放の馬も來りしにより、怪我も有しなり、此橋のかゝれるは、出火の節の大なる裨益也。

〔名家略傳〕^四吉田雨岡

名は桃樹、字は甲夫、通稱忠藏、鯨岐と號せり、江戸の人、その人となり明敏、吏務に精練して其功勳甚多し、明和の末年、淺草花川戸のわたりに橋を造るの議あり、議者いへらく、水底に巨石ありて橋柱を植るによしなし、かゝれば空しく費の多からんのみといひて遂に果さゞりき、かくて安永のはじめ、雨岡善潛の者に水底を搜らしめて、柱を植つるの法を得たり、建議して橋を造れり、往來の農商人ごとくに二錢を税とす、されば後來修造の用費尤鉅といへども、いさゝかも公帑をつひやすことなし、公私その便利を得ること少からず、その功大なりといふべし、名づけて大川橋といへり、天明丙午の歲、關東洪水の時、河水怒漲、大川橋や、壞損するに至らんとす、事急なり、雨岡以聞をへず、意を決して橋の中間、水勢の最衝突する所の數丈を斷しめければ、よりにて橋の壞損せざることを得たり、人みなその敏捷機警を嘆美せずといふことなし。

〔御府内備考〕^{十三}大川橋

享和二戌年七月二日、掛初以來初而橋中程四十間餘流失致候事。

橋長高欄通八拾四間

同幅板木口方三間半

右橋掛渡し棟梁名前、京橋南ぬし町大工金兵衛

安永四年正月十三日、公方様初て渡御被爲遊候事。

安永七亥五月十三日、大納言様渡御被爲遊候事。

寛政九巳年二月十三日、公方様渡御被爲遊候事。